

氏名	かわた こう 川 田 耕
学位(専攻分野)	博士(文学)
学位記番号	論文博第 477 号
学位授与の日付	平成 17 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学位論文題目	近世演劇の社会学的考察

論文調査委員 (主査) 教授 松田素二 教授 寶月 誠 助教授 大谷雅夫

### 論文内容の要旨

日本の中世末から近世初期にいたる時期は、大きな社会変動があったばかりでなく、説経・幸若舞・古浄瑠璃・浄瑠璃・歌舞伎といった多彩な芸能が生みだされ、多くの優れた物語が語られ演じられた時期でもあった。本論は、当時の社会的諸状況をふまえながら、これらの物語の内容—テーマ・プロット・モチーフなどを吟味し重ね合わせていくことによって、この時期の社会変動—それは世俗化・国家による集権化・法と経済の支配する抽象的社会への変化など、社会学的にいつて一種の近代性をもたらした急速で深い変動であった—を経験した人々の心性とその変化を、ノルベルト・エリアスらのヨーロッパ社会の早期近代における社会変動と心性の変化についての研究を参照しながら、跡づけようとする文化社会学的な考察である。

御伽草子や説経などの中世日本の民衆的な物語を分析すると、そこには分権的な共同体連合を基軸とする中世社会の現実の秩序が明確に表現されていることがわかる。諸共同体を超える超越的な力が存在しないことに応じて、この秩序はしばしば不安定であり時に恣意的な暴力の発動を許している。そのために人々は多かれ少なかれ迫害的になりやすい状況を生きており、それゆえの不安をかかえて、その不安や迫害からの救済の願望などの種々の欲望を外部—神仏あるいは、洞穴の奥や海底などの異界や前世・後世といったこの世ならざる他界—へと投影することによって、迫害者である悪や救済者である善などに取り囲まれた多元的で迫害的な世界で生きていると感じていた。とくに、『小栗』などの説経をはじめとする中世末頃に成立したとされる物語には、西洋における英雄神話とよばれるエディプス的な物語にも通じる、「迫害と復讐」型と名づけられる物語がみられ、親子間の暴力の応酬のなかでの父殺しと世代交代のドラマが展開されている。ここには暴力が十分には抑止されていない中世社会の悲惨と、そこから自力で、あるいは宗教的に救われようとする人々の願望とが表れている。

16世紀終盤以降、諸共同体を超える力である、集権的な国家が形成され、暴力が大幅にこの国家に独占されていくと、迫害的状况は減少し、「迫害と復讐」型の物語も衰微し、宗教的救済も他界も語られにくくなっていく。代わって登場したのが17世紀中盤の「金平浄瑠璃」とよばれる一連の物語であって、これは近世に入って最初に大きな大衆的な成功を収めた物語である。そこでは、国家の力が、源頼光という朝廷・帝に信任された武士として擬人化され、この国家=父に従って暴れ回る四天王が新たな主人公となり、常勝の力となって、酒吞童子のような他界の怪物や地方の反乱勢力を退治することによって、新たな国家の力を寓話的に祝福することになる。国家と父が同一視されるばかりでなく、同時期の仮名草子にみられる教訓的な物語にあっては、個々の家父長制的な共同体もが同一視され、この国家=共同体=父の複合体が絶対的な無謬の力かつ価値として近世社会に君臨することになる。この絶対的な力かつ価値のもと、世界は神仏や他界など宗教的な多元性を失って、いまこの世俗的なこの社会だけが唯一の世界であり、この単一の世界=社会=社会のなかでの主従関係や労働倫理などを強調する世俗的社会適合主義的な道徳が強まり、さらに、葛藤や死の恐怖は存在しないものとして否認されるか、個人の「心」の問題に還元されていく。つまり、この単一の世界=社会を支えるのは自己責任と自己抑圧の諸主体である、ということになる。こうした調和的でありながら強圧的で世俗的な世界観を「近世的世界観」と名づけることができる。

17世紀を通じて形成され定式化されていったこの近世的世界観にあつてはすべては個人の努力次第で調和するはずなのだが、17世紀終盤以降の浄瑠璃などの演劇的世界にあつては、この世界観が唯一の正しいものとして是認される一方で、この世界観にともなう人間的な苦しみが悲劇的な物語によって表現される。近松門左衛門の『出世景清』（貞享二、1685年）の結末における、強い意志と克己の人である景清の、頼朝＝国家への服従と自己懲罰に劇的に表現されているように、中世にあつて人々が外部へと投影していた悪しき欲望、あるいは悪しきものにたいする不安が自らの内部へと取り込まれていく。それゆえ人々は、新たな世俗道徳と共同体を信じながら、自己の内部にある情動を悪いものと感じ罪悪感に苛まれ、抑うつ的となっていく。そのような姿が17世紀終盤以降の演劇において繰り返し表現されることになる。

抑うつ的となった内面には、さらにそうした抑うつを強いてくる他者への、究極的には国家へのルサンチマンさえもが、本人がほとんど意識化できないレベルにため込まれていく。このルサンチマンは敵討物において最も巧みに表現され、敵討物は、とくに曾我物語と赤穂浪士の系統を中心にして、18世紀初頭以降、爆発的な人気を得る。そこでは、殺害される、君父の仇敵が実は国家＝父のスケープゴートにほかならないという心理的なからくりによって、秘かに国家＝父へのルサンチマンが晴らされている。しかしその表現は、カタルシス的な発散に留まり、結局はこのルサンチマンは実現も自覚もされることもない。それゆえ、近世以降の人々にあつては、単に自己の心が問題化し二重化されただけではなく、さらには意識化しえないような、国家＝父をめぐる心の深層をも抱え込んで人格が多層化されていき、だからこそ不可解な罪の意識に一層苛まれるという悪循環に陥っていった。

近松の『曾根崎心中』（元禄十六、1703年）を一つの端緒とする心中物にあつては、このような一連の心性上の歴史的な展開が一つのプロットのなかに凝集されている。国家＝父の法と力によって生まれた新たな世俗的道徳である「共同体の道徳」が表面的には遵守され、主人公はあくまでも「義理と人情」の人であり、近世的世界観の内部に留まろうとする。しかし、国家＝共同体＝父の複合体への反抗と怒りを秘かに含んだ罪悪感をともないながら、許されざる性愛的関係が主題化し、同時に共同体＝父の無力と共同体の道徳の無効が明らかになる時、新たな排他的異性愛への秘かな信仰が、公から分離された私的な領域の創出とともに、求められることになった。この許されざる関係は、当然のように、国家による懲罰を受け主人公たちは死ななければならない、というエディプス的な罪と懲罰の物語が展開される。それは中世の「迫害と復讐」型の物語にみられる親子間の暴力の応酬によるあからさまな親殺しとしてのエディプス的な物語ではなく、国家＝父の法を受け入れた上での、多層化された内面において展開する抑うつ的なエディプスの物語である。かつての近世的世界観における個人の「心」への社会的責任の還元を転倒させて、平凡であつても信頼しあい性的に欲望しあう男女相互の「心中」の崇高さにこそ人生の究極的な意味があるという、新たなヴィジョンへの信仰にかけた、そのような態度にある種の近代性を認めることができる。

かくして迫害され外在化され多元化されていた人間たちのもろもろの欲望と世界が、集権的な国家の誕生を最も主要な契機として、それぞれの個人の内部へと引き戻され組み込まれるにつれて、人々の人格が多層化され抑うつ的となつていった。この中世末から近世初期にいたる日本における変化は、エリアスなどが語るヨーロッパ社会における国家の形成と自己抑制的な「文明化」された人間の登場という図式と類似したものでありながら、それ以上に、宗教勢力や外国などの阻害要因が弱かったために、時間的に迅速で精神的に深いものであつたと言えるだろう。むしろ、日本の近世は、まだ本格的な近代社会ではなく、多くの人があるような深層をかかえながらもそれを否認し、基本的には共同体のなかで抑うつ的に生きていたのであろう。しかし、もしも共同体から脱落するようなことがあれば、もはやそこには中世のような暴力による復讐も宗教的な救済も期待できず、唯一内面の深層において、またその深層を共有しあえると信じていることのできる他者とのつながりにおいて、救いの可能性が見出される。中世からも共同体からも遠く離れた場所で、人は再び他者と出会い、しかもようやくそこで、それまで明確には対象化できていなかった国家の力に直面することになる。

だが、こうした新しい現実認識と心性は、論理的に正当化されてヘゲモニーを獲得することはなく、演劇的に表現され続けるに止まった。17世紀の世俗的で民衆的な道徳的世界観、すなわち近世的世界観は、18世紀の石門心学などによって一部では民衆レベルにおいてもより体系化・普遍主義化しながらも、結局は大きく変化することなく近世を通して正当な、しかし少なからず空疎なものとして受けとめられ続けることになった。

以上の、中世末から近世初期にいたる時期の人々の心性上の変化、すなわち、脱宗教化、世俗道徳の発達、既存の社会へ

の迎合、国家=父へのルサンチマン、さらに排他的異性愛への信仰や普遍主義の進展などは、それぞれに重大な変化であるが、そのように次々と展開していく心性上の変化は、中世から近世への社会秩序の転換—すなわち社会の国家化—と、それのより直截な帰結としての、多元的で迫害的な世界認識から多層的で抑うつ的な人格への心性の変化という、歴史的・社会的・精神的な条件があって、はじめて可能であったのだと思われる。

### 論文審査の結果の要旨

本論文は、16世紀後半から18世紀前半、とりわけ17世紀の日本社会における集合表象の生成について、演劇を手がかりとしてアプローチを試みた、日本近世の歴史社会学的研究である。社会学は、そもそも近代市民社会の分析科学として誕生した出自のゆえに、近代社会を研究対象とすることが通例であった。日本の社会学においても、「近代」を明治維新前後以降の西洋化としての社会変化のなかにみようとすることが一般的であり、1970年代以降、活発となった歴史社会学においてさえ、明治国家成立以後の社会変化が、主要な研究関心に据えられてきた。そのような状況のなかで、近世社会を正面から取り上げた社会学的研究の蓄積は、きわめて限定的なものにとどまっていた。川田氏の研究は、中世末から近世初期にかけての社会全体の構造転換のなかで、人々の心性がいかに変化していったかについて詳細に検討することによって、この未開拓の領域に果敢に挑戦するものであり日本近世の歴史社会学に新しい可能性を付け加えるものである。

本研究の意義は、大きく分けて以下の二点に要約できる。

まず第一の、そして最大の意義は、心性変化の通文化的な一般性を指摘した点である。社会を均質化する強力な国家の形成が、社会に新たな人間像の確立を要請し形成していくことを、ヨーロッパ近代を舞台にして主題的に論じたのは、ノルベルト・エリアスだった。エリアスは、西欧近代社会が、かつてないほどに強度に集権的な、暴力の独占装置としての国家に再編成されていく過程で、自己の性や攻撃性にまつわる情動を抑制統制しようとする超自我が個々人の内面に生成され、その結果、羞恥心をもった内省的な「文明化」された人間がつけられることを、『文明化の過程』において大胆に主張した。

本研究は、日本の中世から近世社会の転換のなかに、エリアスが指摘した国家と自己抑制的主体の誕生が見いだせることを明らかにした。川田氏が注目したのは、17世紀の大規模な社会の構造変動のなかで、一貫して都市部を中心にして高いに人気を持続させた浄瑠璃である。16世紀以前、説経において繰り返し表現される主題は、暴力の日常的な横溢、本来それを統制すべき公的機関の不存在あるいは脆弱化、そして最終的な宗教的救済というもので、それは、中世末期以前に成立したとされる『山椒太夫』や御伽草子の継子いじめ譚などによく表れている。

ところが17世紀から18世紀になると、物語においても無秩序な暴力は見事なほど影を潜めて局所化していく。この時期は、暴力を実質的に独占する単一の卓越した権力集団が生み出され、生活様式や経済活動の細部までコントロールする権力作用の網の目がはりめぐらされる時代であり、エリアスが示したヨーロッパにおける国家形成のメカニズムと相似した状況が出現していた。浄瑠璃はこの時代の変化を取り込み、新しい国家を表象していった。そこに表現される権力者は、それ以前の暴君ではなく、自らの欲望が国家の公的利害とまったく矛盾しないように、社会秩序の維持回復という公的任務に邁進する国家の力の体現者であった。国家と国家の公的体現者は、不死の絶対的力をもった卓越した存在であることが、物語の反復によってくりかえし確認される。こうした新しく生まれた現実の国家は、金平浄瑠璃という民衆的な物語のなかに、一つの想像的形象として描かれていった。この強大な国家が社会生活を統制しはじめると、人々は、その力の前に現実的敗北を強いられ、力を外に向かって発散できずに自己抑制をせざるをえない。川田氏は、17世紀後半に生まれた『出世景清』は、自己抑制が結果として過剰な自傷や自己懲罰にまで転換する過程を典型的に表現したものと指摘する。こうして氏は、国家の形成が自己抑制的主体を生み出すというエリアスのテーゼを、17世紀後半の日本社会において、浄瑠璃という民衆物語のなかで確認することに成功したのである。

川田氏の研究の第二の意義は、文化の歴史社会学的考察の実験的試みにある。つまり、絶対的な国家の出現によって自己抑制的主体に変容させられた過程の解明にとどまらず、人々が、いかにしてそこに自らの生の希望を見いだそうと試みたのかを、物語の変容を題材にして考察してみせたのである。氏が詳細に解明した物語の変容は以下のように図式化される。まず17世紀に、希望と興奮をともなって新たに誕生した国家は、金平物などの物語によって人格化され「父」として絶対的な力の主体として想像されるようになる。しかし単純な幻想から冷め、網の目のように張りめぐらされた権力作用に気づきな

がら、「父」なる形象への希望をもちつづけると、時代物浄瑠璃のように、「父」のもたらした道徳へ固着することで自尊心を保とうとしていく。しかし誰もが「父」を乗り越えられず国家の力と法を内面化せざるをえない。そこに国家（「父」）を恨み父殺しの欲望を潜在させる。その欲望を想像的成就的に描いた物語が、18世紀初頭から隆盛をきわめる敵討物である。この時期同時に、国家の強力な家父長制的秩序の呼びかけに従属しながら、国家（「父」）の目を盗んで異性間の排他的異性愛を追求する心中物、世話物が民衆に広く支持されていく。人々が日常生活世界で国家と向き合いながら、それに対して妥協・折衝しつつ、生の充足をはかっていく可能性を、川田氏は、物語の変容を通して明らかにしたのである。

以上のように本論文は近世日本社会を題材にして、物語分析から、集合的心性の考察を試みた野心的で学際的な研究である。しかしながらいくつかの点で問題ものこる。一つには、物語論と現実社会との関係について、たんなる反映論でも、普遍的な心性モデルでもない相互規定的なものだと主張するが、その論拠は十分につめられていない。また取り上げられる史料、テキストの選択や吟味が、やや恣意的で文献学的には不満が残る部分も存在する。しかしながら、これらの問題点を考慮しても、本論文の優れた意義が損なわれることはない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2005年1月12日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について試問した結果、合格と認めた。